

事例 4 希少猛禽類の狩場創出を考慮した人工林の伐採

(関東森林管理局 赤谷森林ふれあい推進センター)



- ・群馬県利根郡(とねぐん)みなかみ町
相模三国嶺・高畑(あいまたみくにみね・たかはた)国有林
- ・(左) 小規模な伐採の様子 (右) 伐採箇所の上空を飛行するイヌワシの様子

赤谷森林ふれあい推進センターでは、赤谷プロジェクト地域協議会、公益財団法人日本自然保護協会と協働し、群馬県利根郡みなかみ町新治地区の約1万haの国有林野（通称「赤谷の森」）において、生物多様性の復元や持続的な地域づくりを目指した「赤谷プロジェクト」を実施しています。

このプロジェクトでは、希少猛禽類・イヌワシの生息数の回復が課題の一つとなっており、その原因として餌不足による繁殖の成功率の低さが挙げられています。この背景には、人工林のうっ閉により、イヌワシが獲物となる小動物の狩りを行う場が少なくなっていることが考えられました。

同センターでは、プロジェクトで設置している猛禽類モニタリングWGからの提言により、イヌワシの狩場（餌場）創出を考慮した人工林の小規模な伐採に取り組んでいます。平成27年度から継続して取り組み、令和2年度には、約0.7haの49年生のスギ人工林を伐採し狩場を創出しました。これまでの伐採箇所は4か所で約5haとなっています。

これまでのモニタリング調査の結果、伐採後の狩場ではイヌワシが餌とする小動物（ノウサギ、ヤマドリ等）が確認され、年々増加するイヌワシの利用時間からも、餌場として機能していることを確認しています。

引き続き、希少猛禽類の狩場創出を考慮した小規模伐採による効果を継続的にモニタリングしていくこととしています。